

「ジュエリー現代」第2号

『死んだジュエリー』

美術館などに収蔵されているジュエリー作品を眺めていると、ある一つの疑問が頭に浮かぶ。本来ジュエリーというのは、身に着けられて初めてジュエリーとしての機能が生まれるはずだ。にも関わらず、そういった所に収蔵されている作品のうち、比較的新しい作品などは、直接作家から納められている事が多いので、制作されたのち人の体に着けられた事など一度も無い可能性が強い。そしてそのまま永遠にショーケースに展示され、二度と人が身に着けない存在となる。それを考えると、それらは見る者にとっては立派なジュエリーであるかもしれないが、私には「身に着ける」という本来の存在理由を失った、死んだジュエリーに思えてきてならない。

小西潤

2005年4月25日(月)午前4時44分